

## 保育の現場から

# かえるくん

佐藤寛子

昨年卒業した子どもたちと、年長組の一年間、通して楽しんだ遊びが「かえるくん」だった。卒業後、再会を喜び合う時も、決まって誰かが、「かえるくん、たのしかったよねえ」と話題に出すし、彼らのいなくなった後の幼稚園では、ひそかに「かえるくん」の絵本作りに挑戦する人が現れたりしている。そういえば、新しく受けもったクラスの子どもたちから、「せんせいは、かえるがすきなんでしょ？」と言われることが多いのも、去年のことがあるからかもしれない。

画用紙で作られた平面人形の「かえるくん」は、子ど

もたちの、その時々遊びの中で、いくつにも姿を変え、活躍をしてきた。生みの親であるAちゃんの良き相棒であった「かえるくん」が、今では子どもたちの心の中にいて、みんなの気持ちをつないでくれている。お礼の気持ちをこめて、「かえるくん」と過ごした一年を振り返ってみようと思う。

かえるくん、生まれる

かえるくんが生まれたのは昨年の四月。

「はやし（年中クラス）のときのほうが、たのしかった

…と、浮かない表情で登園してきたA子に連れられてきたのが最初の出会いだった。

年長組の生活は、それまでとは違い、「みんなのため」が多くなる。最初は、大きくなったことを喜び、張り切って生活していたA子だったが、だんだんと、今までとのリズムの違いに戸惑い、自分のペースで過ごすことが難しくなっていたのかもしれない。連れてきたかえるくんは、かわいいエプロンを身につけていたが、A子が年中組の時に着ていたエプロンとおそろいだった。

「これ、つくってきたんだ！」  
と、A子は、ちらっと、かえるくんを私に見せるが、そのまま自分の引き出しにしまい、その後、出して遊ぶことはしなかった。

A子の気持ちを背負って、暗い引き出しの中でじっと耐えているかえるくんの心もちは、どんなものだったのだろうか？

「かえるくんを、救出するしかない！」

私が思いついた作戦は、かえるくんのエプロンをかけ

ておく小さなハンガー作りだった。黒いモールにカーブをつけて、何となくそれらしくなってきたころ、

「それ、なあに？」と、A子が近づいてきた。

「小さいハンガー。Aちゃんのかえるくんのエプロンをかけておくのに、どうかなあつて思つて…ちょっと小さかったかな」

「まつて、いま、もつてくるから！」

作戦は大成功だった。かえるくんは何日かぶりに暗い引き出しから、日の当たる場所に出された。ハンガーの大きさもびつたり。その後、まわりで見っていた子どもたちも加わり、ハンガーをかけておく物干し(?)も作つた。

かえるくん、生活が始まる

物干しをついたてに固定すると、A子が、

「おうちもあつたほうがいいよねえ」

と言うので、ダンボールを家の形に切った。

ドアや窓をくり抜くと、A子を中心に、二、三人の子

どもたちで色を塗り始めた。屋根のあたりに大きく、「かえる」と書いて出来上がり。A子はいつの間にか、かえるくんは、割りばしの棒をつけていて、かえるくんは、物干しと家の間を行ったりきたりしていた。B夫は、得意なドラえもんの絵を画用紙に描いて切り取り、やっぱり割りばしの棒をつけながら、みんなに言った。「ドラちゃんは、かえるくんの友達っていうのはどうかな？」

こうして、かえるくんの生活の舞台ができ、共に暮らす仲間が誕生すると、子どもたちからお話がどんどん生まれてきた。

かえるくん、トップスターになる

「かえるくんと風船」が最初の作品だった。

天気が良いので、ドラえもんを誘って、お買い物に行くことになったかえるくん。無事にお店に到着し、お気に入りのエプロンを購入。喜んで帰ることになるが、帰り道に迷ってしまい、お化けの国をさまようことになる。

る。怖くなってドラえもんに助けを求める。ドラえもんがボケットから取り出したものは、折り紙で作った魔法の風船。かえるくんが、風船をお化けに向かつて投げると、お化けはみんな風船に変身して……といった内容である。お話ができると、みんなに見せたいくなる。

「小さい組をよんでこようよ！」

誰かがそう言うと、あつという間にお客さんが集まってきた。

この日から、かえるくんは、繰り返し上演されるペープサートの主人公として忙しい毎日を過ごすことになる。上演を重ねるごとに、演技に磨きがかかり、毎日通ってくる小さい組の常連さんもできた。

A子をはじめとした年長児は、小さい組のため、自分たちのために、せっせと準備をし、後片づけも実に丁寧に行った。大事なお客さんとして、小さい組の子どもたちをもてなす中で、自然とかかわりが深まり、小さい組のお帰りに、保育室に行き、身支度の手伝いを進んでくれる人も現れた。

「みんなのため」の生活は、まずは自分たちが楽しまなくちや生まれぬ。当たり前のことなのに、私は大切なことをちよつぱり忘れそうになっていたことに気づかされた。

### かえるくん、引退の危機？

二学期になっても、かえるくんのペープサートは続いた。運動会の後は、「かえるくんの運動会」、遠足に行けば、「かえるくん、動物園に行く」と、子どもたちは自分たちが経験したことを、かえるくんの舞台にも、再現した。けれど、お話のレパートリーが増える一方で、一作目の「かえるくんと風船」のような勢いはなく、だんだんと客足も途絶えていった。

ちよつぱりそのころ、隣のクラスでも人形劇が始まり、一緒にできればお客さんも増えるのではないかと考え、幼稚園に古くからある人形劇の舞台を使ってみることにした。

舞台の効果もあり、小さい組のお客さんはせつせと足

を運んでくれるようになった。ところが、ビニール袋を利用して作ったコブタ人形による「三匹のこぶた」が人気を博し、新しいお話作りが思うように進まない「かえるくん」シリーズは、だんだんと忘れ去られていった。かえるくんは、劇のはじめや終わりのあいさつ、幕間のショーなどに参加する程度で、出番が大幅に減った。

「かえるくんも、そろそろ引退かしら？」とささやかれ始めたころ、誰かが廊下にこんなポスターを貼っていた。

### かえるくんげきじょう

### さんびきのこぶたやっています

子どもたちは、どうやら、あの古い舞台を「かえるくんげきじょう」と呼んでいるらしかった。

経験したことを遊びの中で再現しながら、過去と現在と未来と、しっかりとつながっている子どもたち。私は、彼らがじっくり考え、やってみようとからだを動かすことができる時間と空間とをしっかりと保証しなければ……と思った。

かえるくん、子どもたちと共演する

二学期終業式に教員による影絵を楽しんだ子どもたちは、三学期に入るとすぐに、「自分たちも影絵をやってみたい」と言ってきた。シートで作った簡単なスクリーンと、OHPを用意すると、子どもたちは、最初は自分たちを映して楽しんだ。しばらくすると、OHPシートに油性ペンで絵を描き、それぞれ映し始めた。A子は、やっぱにかえるくんを描いた。それをはさみで切り、割りばしをつける。二代目かえるくんの誕生だった。

かえるくんの影が、光源に近いと大きく映り、遠いと小さく映ることを発見したのは、C夫だった。C夫は、私が用意しておいた影絵の本にも興味をもち、手や腕や頭を使ってうまく形をつくっては、オオカミやネコ、ハトやカニなど、動物の影絵の研究に熱心に取り組んでいた。

そんな中で生まれたのが、新作影絵「かえるくん、うみにいく」である。

天気が良いので、海に出かけたかえるくん。ところが、海に着いた途端、高波にさらわれ、おぼれてしまふ。かえるだというのに、全く泳げない。そこに通りかかったのが、C夫の演じるハクチョウ。かえるくんは、ハクチョウの背中（C夫の頭）に乗っかり、ヤシの木の生える島まで送り届けてもらって、めでたしめでたし……というものだった。高波は、波の形に切ったOHPシートをOHPの画面上で動かす。かえるくんと、C夫の扮するハクチョウは、スクリーン近くで演技。光源からの距離による遠近法を見事に利用した作品で、かえるくんは、初めて子どもたちと共演を果たすことになった。

かえるくんを動かす人、ハクチョウ役のC夫、高波を操作する人、ナレーション、OHPシートに描かれた背景を担当する人、BGMのピアノ演奏者、お客さんの呼び込み、座席案内……と、脚本・演出に加え、子どもたちはそのほぼ全部を自分たちで考え、それぞれに役割を分担し、連日、まるで仕事のように、せっせと取り組んだ。

子どもたち、かえるくんになる？

「かえるくんげきじょう」で卒業間際に上演された最後の作品は、影絵「お茶のみげきじょう」だった。

OHPシートに描かれた障子、みかんののつたちゃぶ台を背景に、スクリーンの前では、映し出されたたちゃぶ台を挟むようにして、C夫とD子の二人が向き合って座る。C夫が手で急須をつくり、お茶を注ぐまねをする。D子が同じく、手をつくった湯のみで受ける。すると、突然電話が鳴り、「地震がくるので気をつけてください」と警告。間もなく画面が大きく揺れ、二人もそれに合わせて大げさなからだを動かす。程なく地震は収まり、また二人でお茶を飲む……といった内容だった。

この作品には、かえるくんは登場しない。OHPシートに描かれた風景の中で、自由に演じるのは子ども



たち自身であった。子どもたちは演じた後、ちゃぶ台の描かれたOHPシートを見せながら、

「ぼくたち、この中に、入っちゃったんだよ。こびとになつたみたいだよね」

と私に言ってきた。私には、子どもたちが、かえるくん、重なつて見えたような気がした。

子どもたちの作るお話は、お化け、高波、地震と、必ず目の前に大きな壁が立ちはだかる。けれど、時には友達のを借り、時には友達には友達と一緒を過ぎ去るのを待ちながら、見事壁を乗り越え、最後は必ずハッピーエンドとなる。Aちゃんの戸惑いから誕生した「かえるくん」も、子どもたちと一緒に見事に壁を乗り越え、元気に巣立っていった。子どもたちは、これからも、いくつもの壁に遭遇するだろう。けれど、その時にはきつと、みんなの中の「かえるくん」が、力を貸してくれるに違いない。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)